

弘法大師空海における「人間」定義

佐々木大樹（大正大学専任講師）

弘法大師空海（774～835：以下「空海」）は、平安時代初期に活躍した僧で、真言宗の開祖として知られる。空海は、幼少期から大学に至るまで儒教・道教に関わる中国古典を学んだが、仏教と出会い、諸寺・山野での修学の末、三十一歳で唐に渡り、体系的な密教を日本に伝えた。空海の密教は、『大日経』『金剛頂経』および周辺の儀軌を中核とし、即身成仏・法身説法など、独自の学説を提唱した。

空海の著作は数多いが、その全般において「人間」存在に対する考究の跡を読み取ることが可能である。その傾向を大別すると、二つの視点に集約することができる。

一つの視点は、『十住心論』『秘蔵宝鑰』第一住心などに示されるように、雄羊のごとく本能・欲望に支配され、迷い苦しむ人間の姿である。これは仏教の哲理をもって現実の人間を冷徹に分析したものであり、仏教全般に共有される視点といえるであろう。空海は、どのような人間であろうとも、仏陀の教法による適切な導きがあれば、人間として向上することができるとの考え方もまた示している。

もう一つの視点は、どのような人間でも、仏陀と同一の本性を有している、さらに積極的に言えば、仏陀と衆生は根源的に平等であるという考えである。これは大乘仏教の如来蔵・仏性思想、あるいは本覚思想にもとづく原理と考えられている。このような思想傾向は、空海的全著作にわたり、「自仏」「自心仏」「自身仏」や「本覚」「真覚」など、様々な言葉が駆使され表現されている。このような文脈で想定される仏陀とは、法身大日如来であり、あらゆる存在を包摂し、かつ内在する仏陀と考えられる。空海は、主著『即身成仏義』において六大の概念を提示し、「人間」という枠組みを超え、あらゆる存在が大日如来と深く結びつくことを主張している。

これらの視点のうち、空海思想において特に重要なのは後者の視点、換言すれば仏陀と衆生の同一性・平等性という考え方である。本発表では、「自心仏」「本覚」などの言葉を手掛かりとして、同一傾向を示す言葉・概念を、空海的全著作から網羅的に収集し、整理することを第一の目的としたい。その際には、空海の著作年代の推定に関する近年の研究成果も指標として導入し、かかる思想形成において、歴史的展開・変遷があったかについても検証してゆきたい。

また空海思想形成に影響を与えたであろう仏教・密教の経論、特に『大日経』『金剛頂経』および『大日経疏』『菩提心論』『釈摩訶衍論』などの背景思想についても可能な限り目を配り、空海の「人間」定義について探ってゆきたい。

キーワード： 弘法大師空海 自心仏 本覚